

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう <http://www.tda-j.or.jp>

2016-06-01

目次

- 表紙
「ランドスケープと建築」
／(絵・文) 八木 健一
- 見開
TDA NEWS
「ランドスケープと建築」
／萩野 一彦
「ランドスケープと建築」あるいは
「外部空間と建築空間」／井上 洋司
- 見開
ランドスケープ事情
「ベトナムのアーバンデザイン事情」
／望月 真一
- 裏表紙
シリーズ：地域から
「城端」その2
／松井 大輔
- 裏表紙
景観ビジネス最前線
／(株)復元屋
- 裏表紙
ホワイトボード



ランドスケープと建築

ランドスケープと建築は対立概念ではなく、表裏一体のモノである。私は、ランドスケープデザインを「造景」と訳し、都市、土木、建築、造園、芸術の分野が重なり合う領域だと定義付けている。残念ながら我が国の大学での建築教育は、建築の個性や独自性を追求するような傾向が強く、周辺環境との調和に関する配慮が後回しにされているように感じられる。建築業界では「建築外構」という言葉が使われるが、これはまず建物ありきで、その敷地内のオープンスペースをどうするかという概念であって、本来のランドスケープデザインではない。

フランスの建築に関する法律では「建築は文化の表現であり、建築のデザイン、建造物の質、その周辺環境に対する調和、自然環境や都市景観の尊重は、公益である。」と明確に唱われている。

昨年、新国立競技場のザハ・ハディド案が白紙に戻されたが、膨大な建設費の問題もさることながら、そもそも神宮外苑という場のコンテクストを読み取っていないということが大きな問題であった。私も含めて多くの人たちがその建設に異論を唱え、旧競技場の改修存続を求めたが、さっさと取り壊されてしまった。一部の造園家集団は、ザハ案の建築デザインそのものには手を加えずに、周辺の人工地盤をやめてその土地に緑化を施す案を提示した。私はそのプレゼンテーションを傍聴したが、日本を代表する著名な造園家たちでも建築家に対して遠慮しすぎではないのかと残念に思った。欧米ではランドスケープアーキテクトの職能が確立しているが、やっと10年ほど前にその資格制度ができたばかりの我が国では、ランドスケープアーキテクトの社会的認知はまだまだこれからだ。

TDA サロン『ランドスケープと建築』 開催報告

2016年3月8日、TDA サロン『ランドスケープと建築』が開催された。話題提供者として、造園／ランドスケープを軸に都市計画、土木、建築の領域に跨るランドプランニングが専門の、萩野一彦氏をお招きして、お話しいただいた。

また、TDA 監事の八木健一、当機関紙編集長の井上洋司から、各々が手掛けたプロジェクトの紹介、ランドスケープと建築・まちづくりの関係性について話題提供を行った。

今号 NEWS では、その論旨とそれにまつわる寄稿を掲載した。



ランドスケープ事情



写真1：グエン・フエ通りのアイストップ・ホーチミン市役所をみる



イメージパース：市役所側からサイゴン川に至るまでの通りの全貌

1 「ランドスケープと建築」 ランドスケープアーキテクトが観る建築・まちづくり



萩野 一彦

日本大学理工学部まちづくり工学科客員教授
㈱プランニングネットワーク 上席技術師長

1. 造園／ランドスケープと建築

ていおくいちによ庭屋一如という言葉がある。原典は不明だが、建築との関係はこの言葉で言いつくされるのだが、さらにランドスケープの本質をとらえた中村良夫先生の解釈を伺ったことがある。「山水の重要なところを庭でおさえ、そこに建築をつくった。つまり、庭が先。」であると言う。極めて国土計画的な視点である。また、「場（庭）＝間＝Public（公）＝官と私の間」であり、日本は縁側的な空間である庭を大事にしてきた結界型都市であると言う。極めてまちづくり的な視点である。

一点目の国土計画的な視点は、今風に言えば「グリーンインフラとしての庭」といえるだろう。例えば、小石川後樂園は神田上水の要衝・江戸の生命線であったし、南禅寺周辺の別荘庭園群は、琵琶湖疏水とその流域保全の目的があった。また、多くの借景の庭はその借景対象の自然を恒久的に景域保全していた（修学院離宮、円通寺、天龍寺、栗林公園、浜離宮など）といえる。

造園は囲われた敷地でのデザインに限った行為ではない。『日本の造園』（1964）において、池原謙一郎は、日本の風景を形成した「アノニマスな（作品化されない）造園」があったとして、これからの日本の造園の取り組む方向性を示して

いた。

しかし、このような造園／ランドスケープの本質的な職能のあり方は、池原の示唆から50年の時間を経ても認識が薄く、本来の役割を發揮しているとは言い難い。

2. ランドプランニング～いくつかの事例

造園／ランドスケープの忘れられた役割を機能させるために、私はランドプランニングの技法的・制度的確立が有効だと考えている。ランドプランニングの実践事例として、いくつかご紹介しておく。

丘陵地開発において、マスタープランから造成計画、建築計画調整、ランドスケープ設計までを一貫して行った事例として、湘南国際村、びゅうヴェルジェ安中榛名、沖縄科学技術大学院大学が挙げられる。いずれも、造成をデザインと捉え、開発土木、建築、都市計画、造園を総合的・自律的に行うランドプランニングを実践した結果、市民・ユーザーに愛着を持って受け入れられ、持続発展性の発現がなされていると判断できるものである。

また、JR相見駅前地区やパークシティ浜田山においては、大きな造成を伴わないものの、地域の環境・景観資源をマスタープランにとり入れ、建築計画調整やランドスケープ設計までを一貫して行ったことで、同様の成果を得ている。

詳しくは、『丘陵地開発における造園的保全の技法としてのランドプランニング』（萩野一彦：2011）を参照いただきたい。
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/thesis/Hagino_Kazuhiko.pdf

ベトナムのアーバンデザイン事情

～ホーチミン市グエン・フエ通りから～

アーバンデザインの視点から見ると、ベトナム最初の本格的な歩行空間の第一号はホーチミン市解放40年を記念して2015年3月に完成したグエン・フエ通りだ。もとは、緩速車線もある広幅員道路のグエン・フエ通りを、市役所を起点してサイゴン川までの延長640メートル、幅員64メートルの市を代表する大規模なオープンスペースに作りかえた。総工費約24億円というから、ベトナムでは相当コストがかかっている。

ベトナムの法制度は、法文だけに限っては、住民参加等の面でも、体系化されているとは言えない日本の都市計画関連制度よりは先を行っている面もある。また都市計画法（2009年改正）では、マスタープランの策定とともにアーバンデザイン計画が義務付けられ、この分野が注目を集めているが、その定義、概念は漠然としている。さらに中国の社会システムを踏襲しているため大規模民間不動産開発が都市拡大の原動力となっており、その開発計画が視覚化したものが、「都市設計」として一般化していることが混迷に拍車をかけている。

グエン・フエ通りでは、両側2車線を残すが、歩行者空間が都市軸として作られたことになる。ベトナムでは象徴的な巨大空間を街の中心に配置するのが普通だが、ここでは様々な人が集まるオープンスペースとして、一見これ見よがしの自己主張の激しいデザインでなく、抑え気味で好感が持てる。しかし、我々には見慣れたデザインで、どこの国か

3. おわりに

今後の「ランドスケープと建築」を考える上では、造園／ランドスケープが自らその大きな特徴（当然主となる植栽のデザイン以外の特徴）を認識し活かすことが重要であり、本文中に「グリーンインフラ」、「アノニマス」を挙げた。また、敷地の囲いから出て自律的に街づくりに携わるため、ランドプランニングの必要性を提起した。

建築に対しては、単体でなくまちづくりの中で捉える視点が重要であり、これは都市デザインの観点と同じである。建築と土木に大きく二分され動いている現状の中、造園／ランドスケープと都市デザイン・まちづくり分野は、今後強く連携し一体となって活動していく必要性を切に感じている。



湘南国際村（模型写真）



びゅうヴェルジェ安中棟名 左：天空の丘 右：あらくさの丘



沖縄科学技術大学院大学

(株)アトリエ UDI 代表 望月 真一



写真2：グエン・フエ通りの夜の利用状況



写真3：両側2車線ずつの車道と、中央の歩行空間

2

「ランドスケープと建築」 あるいは「外部空間と建築空間」



井上 洋司

TDA 景観文化編集長／
（株）背景計画研究所 代表

40年も前の事で恐縮だが、このテーマで語ろうとする時、いつも思い出す事がある。私の師・伊藤鄭爾は民家の研究者でもあった。

ある日、伊藤から“民家群はいずれ無くなるから、あるうちに見ておいた方がいいぞ”といわれた。当時は高度成長のまっただ中、古い民家群は次々に新しい素材での改修や立て替えが行われていた。そのような状況のときいくつかの村々を見て回った。中には廃村ぎりぎりの村もあった。

一方、次々に消える民家を地域の文化を代表する文化財と考える世論もあり、解体される民家を自治体等が譲り受け、用意されたまとまった敷地に移築する、いわゆる民家園もオープンし始めていた。この両者を同時体験できた事が、私がこの道で仕事を始める大きなきっかけを与えてくれた。

この両者には民家という建築は同じでも大きな違いがあった。一言でいえば村の民家のもつ「佇まい」であった。この違いを感じてから集落民家の周辺を今まで以上に注意深く見るようになった。そこにはその地でより安全に、より快適にすごせる多くの「知恵」を見る事が出来た。

水の確保とその動線の取り方、地形に対してどのように建築物を配置するか、地域の風や日照等を踏まえ工夫されている。暴

風等への対処等から石垣や樹木の配置、さらに、建設用地スペースをいかに確保するか、等それぞれの立地によって異った外部空間との関係が構築されていた。これらはまぎれも無くランドスケープデザインの諸要素である。



1970年代の徳島県下影地区

つまり、この認識をとうして、私は建築の外部空間の設計という仕事を始めた。そのような仕事があっただけでいいはずと思った。民家とその外部空間を見ることがあったからだ。いま、ランドスケープデザインと呼ばれている世界で求められている事は様々であろうけれど、日本におけるランドスケープデザインのあるべき指針は自然の中に佇みつけてきた民家群の外部空間の設えの中に大きなヒントがある事には変わりないと思っている。だからこそ、地形や自然の諸要素と建築物の関係どう整えるか、私達は、昔から存在する様々構築物や建築、土木物等を的確に観察、解析する事が求められていると思う。

きっとその中にこそ新たな日本のランドスケープデザインの元があるような気がしてならない。

わからないという部分で、物足りなさを感じるとともに、ベトナム最初の本格なものであるだけに、残念な部分が多い。特に、熱帯地域の工夫がないのは残念で、御影石中心の舗装は昼間の照り返しが強く緑陰もなく、とても歩く場所となっていない。蒸散作用の活用等、熱帯ならではのデザインがあっただけだ。

その他、技術的な問題も様々ある。フランス時代からの標準設計がそのまま使われ、排水勾配が小さいうえに、雨水桝も少なく、大雨の時は水たまりの中を歩くことになる。車道も自然石舗装だがディテールに工夫がなく、構造物の周りの舗装は竣工半年にもかわらず欠けが目立ち、2～3年後には大規模補修が必要になるか、車を止めることになるだろう。イベントも度々催されているが、それに対応した装置も想定されていないなど経験不足が目立っている。しかし、週末、夜間は人々がどこからともなく集まり、またたく間に人ごみができ人それぞれ解放された新しい都市空間を楽しんでいる様は社会の変化を享受しているように思える。

経済成長まっただ中のベトナムでは、こうした大規模なアーバンデザインが続々と実現されていくことだろう。世界遺産の古都フエのフォン川両岸にボードウォークの提案があり、ダナンの広大な河川公園も国際コンペが実施される予定があるなど、これまでの不動産開発全盛の時代から、街の中のアーバンデザインの流行の時代が迫っている。

じょうはな
「**城端**」 **その2**

地域間交流が生み出した町家再生



蔵回廊と曳山



再生された「荒町庵」

今年も5月4・5日に城端曳山祭が開催された。4日の宵祭は強風のなかでの開催だったが、5日の本祭では見事な晴天の下を庵屋台と曳山が巡行した。ここ数年で一番美しい曳山祭の風景であった。

今年の曳山祭には東京や新潟から約50名の外部応援者が参加し、「じょうはな庵」や「荒町庵」などで庵唄を所望した。これは曳山祭への参加を通して地域外の人々に城端の魅力を発信し、その魅力を理解してくれた人たちに城端のまちづくりを応援してもらおうという取り組みで、今年が4回目の開催となる。

この取り組みは、庵屋台と曳山の巡行ルート上に位置する旧中谷家住宅という町家を住民有志3名が購入し、じょうはな庵として再生したことに始まった。彼らは「空き家となった町家が壊され続けることで城端の歴史的町並みが消失し、曳山祭の風情までが失われてしまうのではないかと」危惧し、明治期に建てられたこの町家を購入した。購入後、じょうはな庵は2013年の曳山祭から庵唄の所望宿として使用され、地域外の応援者の増加に寄与している。町家という伝統的な建築空間での庵唄の所望は、この地域の伝統文化の全てを体験させてくれるような趣を持ち、これに夢中になる人が多いのであ

る。また、普段のじょうはな庵ではまちづくりの勉強会やワークショップ、庵唄の練習会場などが開催され、地域住民のまちづくりの理解向上や伝統文化の継承にも貢献している。

さらに、じょうはな庵の庵唄所望によって生まれた応援者とまちづくりに関心を持つ城端の地域住民が協力し、2015年に一般社団法人城端景観・文化保全機構が設立された。この組織は城端の空き家となった町家を取得・再生し、伝統文化の継承の場として次世代に繋げていくことを目的としている。茶屋建築である荒町庵（旧米田邸）は、この組織による最初の再生物件となる。今年の曳山祭で、荒町庵では実に半世紀ぶりとなる庵唄の所望が行われた。

以上のように、城端の町家再生はたった3名の住民による空き町家の購入という小さな動きから始まった。しかし、この町家がまちづくりの拠点となり、多くの地域住民と地域外の応援者を巻き込んだ大きな渦へと取り組みを成長させた。じょうはな庵での庵唄所望が荒町庵の再生へと繋がったように、荒町庵での庵唄所望が次なる町家再生に繋がっていくのだろう。このような活動を持続させるために、今後も城端の魅力を発掘し、本質的に理解し、発信していくことに努めたい。

景観ビジネス最前線

滑りにくく、汚れにくい歩行者専用床タイル

ジキ・ユカタイル

小ロット・多品種・デザイン張りにも最適！オリジナルカラー対応！

滑りにくい！
滑り抵抗値
[BPN] **50**以上

汚れにくい！
タイル吸水率 **1%**以下

株式会社復元屋 ～未来への継承～
〒479-0003 愛知県常滑市金山字北大根山 8-1 Tel. 0569-84-2002 (担当者: 安藤)

【施工例】大村中央商店街

ホワイトボード

毎号不思議に思うことがある。緩やかな執筆依頼をしているのに今季も、見事に起承転結している。“ランドスケープと建築”はともにあってはじめて景観を成すが、それは記事「地域から」の「たった3人から始まった・・・」とのくだりのようにささや

かな活動からはじまる。TDAの活動もこの号の発刊直前に「幕張住宅街区の検証街歩き」を、6月末に第4回「景観デザイン交流会」7月にはTDAサロン等を予定している。ささやかであるが少しずつ。詳細はホームページを！！